「同一性」の諸相

不可識別者同一の原理をめぐって

横路　佳幸（慶應義塾大学・日本学術振興会）

本発表における私の目的は、「同一性」が持つ特徴的な諸相を論じることで、不可識別者同一の原理（the principle of the identity of indiscernibles; 以下 PII）の妥当性をめぐる問題を解決するための見取り図を提出することである。PII とはおおざっぱに言えば、あらゆる性質を共有する個体が同一であることを述べる必然的な原理である。この原理の妥当性をめぐっては、かつて M. ブラックが強力な反例を提示して以来、膨大かつ幅広い論争が巻き起こされてきた。ブラックの主張によれば、二つの個体 *a* と *b* 以外に存在者が存在しないような対称的な世界では、PII は疑わしい。というのも、その世界において *a* と *b* は、大きさや重さなどを完全に共有しつつ同一でないとしても何も不思議ではないからである。

しかし、このブラックによる議論に対して PII の支持者は少なくとも次の二つの応答を行うことができる。第一に、*a* と *b* は本当にあらゆる性質を共有しているのだろうか。たとえば、「*b* から少し離れている」という性質は *a* には当てはまるが *b* には当てはまらない。それゆえ、個体を含む意味でいわゆる不純な（impure）性質によって識別可能であるため、*a* と *b* の存在は PII に対する反例とはならない。第二に、もし *a* と *b* があらゆる性質を本当に共有しているのだとしたら、*a* と *b* の差異性は何によって説明されるのだろうか。この問いに答えることができない限り、個体の差異性は原初的な事実となる。しかし、そうした原初性を認めると、互いに数的に異なるが識別不可能な 20 個もの個体が同じ時空領域を占めうるという馬鹿げた可能性を排除できない。ゆえに、PII に対する反例は厄介な問題を新たに生じさせてしまう。

もちろん、こうした反論に対して PII の批判者は次のように再反論することができる。すなわち、PII 中の性質 Φ の内に不純な性質を持ち込むことは、すでに *a* と *b* そのものの識別を前提としているがゆえに、PII の支持者も結局のところ *a* と *b* の差異性を識別可能な性質によって説明できているわけではない。また、個体の差異性や同一性の成立が原初的で根拠を持たない事実であることは、本当にそれほど問題なのだろうか。同一性は必然的にあらゆる個体とそれ自身に当てはまるほどに基礎的なものである。それゆえ、20 個もの識別不可能な個体が同じ時空領域を占めるという可能性は、さらなる説明を要するものではないのかもしれない。

以上の一連の論争状況（それは PII の妥当性をめぐる論争のほんの一部にすぎない）に鑑みて、本発表において私が提示する主張は次のものである。すなわち、PII は、そこに現れる「同一性」をある相のもとで捉えるならば妥当でない一方で、「同一性」を異なる相のもとで捉えるならば妥当な原理である。こうした主張を展開する際に私が道標とするのは、D. ウィギンズの断片的な示唆にインスパイアされた「同一性」の諸相である。

同一性の形而上学は、ウィギンズによれば、同一性の認識論を再構成することしかできないものである。同一性はあまりに基礎的であるがゆえに近寄りがたいが、それを我々の実践に即して再構成する限りにおいては扱いやすい。ウィギンズの戦略はこうして、同一性関係ではなく、より実践的かつ日常的な概念としての「同一性」の解明を試みるものである。

ウィギンズの基本的指針を大きく拡張することで私が示したいのは、「同一性」が少なくとも二つの相のもとで捉えられるということである。一つは、最も基礎的な「同一性」である。それは「すべてのものはそれ自身と同一である」と述べる自己同一性に等しく（記号化すると $\lambda x(x = x)$ となる）、自己同一性の根拠を問うことは、古くから形而上学で盛んに論じられてきた「個体化の原理とは何か」という問いを提起することにほかならない。個体 *x* のみに関わるという観点から見ると、こうした基礎的な「同一性」は、単項的であると同時に、*x* が自己同一的であるとしか述べない以上ほとんど認識的には役に立たないだろう。

他方でもう一つの「同一性」は、認識的に有益な情報を与えうるような相のもとで捉えられ、「同一性の規準」に関わるものである。私は、同一性の規準がネコや山、人間などの多様な種別概念（sortal concept）*F* と親和的な関係を築いていると考える。つまり、我々が日常的・実践的に用いる「同一性」は、先の自己同一性の単項の相ではなく、個体 *x* が個体 *y* と「同一」であるかどうかを種別概念と結び付けて問題とする二項の相である（記号化すると $\lambda x \lambda y(x = y)$ または $\lambda x \lambda y(\exists F(x =_F y))$ となる）。また、この実践的な相のもとで理解された「同一性」または「同じ *F*」は、かつて J. ロックやウィギンズが示唆したように、時空領域の占有とも結び付く。彼らによれば、同じ種別概念 *F* に属し、かつ同じ時空領域 *R* を占有する個体が二つであることはありえないとされる。

私の見立てでは、以上の「同一性」の諸相を先の PII の問題に適用すると、次のように述べることができる。すなわち、第一の相のもとで捉えられた「同一性」が PII に現れるとすると、PII が妥当な原理であるかどうかは結局のところ、個体化の原理をどのように考えるべきかという問いに依拠することになる。その問いに正確な答えを与えることが困難であることは、これまでの形而上学の歴史を紐解かずとも明らかである。ここでは差し当たり、個体 *a* と *b* の個体化子をそれぞれそれ自身すなわち *a* と *b* とみなし、「自己同一性」の成立を事実上原初的なものとしておこう。すると、このとき PII は誤りであるように思われる。「同一性」の第一の相においては、ブラックによる反例を妨げるものは何もないからである。

しかし他方で、第二の相のもとで捉えられた「同一性」が PII に現れるとすると、第一の相においてすでに個体化がなされた個体の「同一性」を我々は第二の相のもとで再構成するほかはない。すると、ブラックによる反例に登場する個体 *a* と *b* は、不純な性質によって常に識別可能となるはずである。というのも、ブラックの反例を実践的な「同一性」の第二の相から眺めるとき、個体化や自己同一性は問題とならないからである。その結果、PII はトリヴィアルに真であることが帰結する。さらに、20 個の個体ケースについても、第二の相における「同一性」は完全に排除することができる。というのも、先に述べたように、実践的に再構成された「同一性」のもとでは、同じ種別概念に属し、かつ同じ時空領域を占有する個体は同一でなければならないからである。

したがって、PII の妥当性、差異性や同一性の原初性、不純な性質の容認などの諸問題を解決するための見取り図は、「同一性」の諸相を解明することで描くことができるのである。